

## 第4回「愛猿記賞」(エッセイ部門)【佳作】

「紺帽子いっせいに」 東京都 小野 みふ

毎朝八時ごろ、近くのアパート前にとまる幼稚園バス。家からたった百メートルほどの距離でも、入園したての娘にとっては、ぬかるんだ泥道のようだったに違いない。

ポケットにハンカチを入れたあと、重たいリュックを背負い、片方ずつ靴をはいて——。

「よし、いこう」

「……うん」

やっと外に出たところで、なかなか進まない。繋ぐ手に、ぎゅっと力が入る。みんながバスに乗ったあと、ぽつんと突っ立ったまま。

「いっしょに歌って楽しもうね」

先生に励まして、娘がしぶしぶ乗り込む。

涙ぐんだ顔を見送るたび、胸が痛んでたまらない。後ろ髪を引かれながら踵を返して、溜息交じりに玄関を開ける。脱ぎっ放しのパジャマを拾いあげて、ついぽーっとしてしまう。

(ちゃんとスモックに着替えたかな? 元気よく遊んでいるといいな)

いくどかじとしんぱい  
幾度家の手を止め、どれほど心配したことか。バス停に迎えにいっても、相変わらず、  
もたもたして動かない。そこで早く慣れるために、身支度の練習に励んだ。もっとゆとりを持てるよう、共に早寝早起きを心がけた。

「ママ、あのね、きょう」

娘が歩きながら、ぼつぼつ語り始めたのは、夏休みが明けてしばらくしたころ。なかよし

の友達ができるにつれて笑顔が増えて、バス停までの行き来もスムーズになっていった。

みんなから遅れてうつむき加減に降りていたのが嘘のように、紺色の帽子がぽんぽんぽんと飛び跳ねる。さよならの挨拶をしたあと、いっせいにママやパパの元に駆け寄る。

「みてみて、おり紙やったんだ」

娘が得意げに手提げ袋を開いてみせる。ぱっと覗けば、色とりどりの動物がいっぱいだ。

「とってもにぎやかだね。どれも上手よ」

「ママにはいっ、ぞうさんあげる！」

「まあ、ありがとう」

「ねえ、しってる？　ぞうさんのながーいお鼻はね……」

ゆかいなおしゃべりが、はず彈む、彈む。誇らしげな笑顔が、キラキラ眩しい。朗らかな声を響かせながら、あっという間に家に到着だ。

穏やかな小春びよりの朝。

「ママ、はやくうー。バス来ちゃうよー」

娘がさっと靴をはいて、大きく手招きする。

あわててブーツに足をつっこんで、もすもす後を追いかける。

「あっ、来た」

娘が少し丈の短くなったスカートを揺らしながら、一番乗りだ。すっかり慣れて、お姉さんらしくなってきた。

「バイバイ」

元気いっぱいの子どもたちをのせて、赤いバスがゆっくり発車していく。角を曲がって見えなくなったところで、そっと手を下ろす。もう何も心配することはない。

さあ、新しい一日の始まりだ。